

## 令和6年能登半島地震における救護班第9班の活動

2階外来 看護係長 白井 亜耶

活動期間:2024年2月24日(土)~2月28日(水)

活動場所:輪島市避難所各所(輪島中学校、河原田公民館、河井小学校、自主避難所各所)

活動内容:第9班として、輪島市役所本部の現地コーディネーターのもと、各避難所における巡回診療と避難所アセスメント、こころのケア活動を行った。

### 【巡回診療】

各避難所において、避難所管理者の方と情報交換を行いながら、診療の必要がある被災者に対する巡回診療を行った。

輪島市の中核病院、診療所や薬局などの再開に伴い、巡回での診療対象者は減少している印象であったが、長引く避難所生活や環境変化に伴い、褥瘡が発生してしまった方や、避難所の暖房器具で低温熱傷を起こされている方、感冒症状の小児などの対応を行った。また長期間の車中泊後で、両下肢に腫脹がみられる方がおられ、医師の診察と看護師による下肢マッサージ、弾性ストッキング着用の指導を行った。

高血圧などの持病の療養を行う状況が、避難生活により変化しており、コントロールが不良となっている被災者の方が多い印象であった。中核病院や診療所などで継続内服処方を受けられてはいるが、自身の血圧計が震災で壊れてしまい、以後は避難所で測定できていない方などがおられた。避難所によっては、血圧測定ブースが設けられているが、支援物資などに紛れて設置されており測定行動に繋がっていない状況もあり、管理者の方と相談し、血圧計の設置場所の変更などを検討した。

また、震災後に認知機能が低下し、徘徊するようになった、などご家族が心配されるケースも散見され、避難生活における環境の変化やストレスに伴う、二次的障害を予防するための医療、保健活動の必要性を感じた。

### 【こころのケア】

巡回診療に伴い、避難所でのこころのケア活動を行った。避難所管理者や支援者自身が被災者であり、自宅が全壊し避難所で生活をしながら出勤されている方もおられ、疲弊が蓄積していた。また、ストレスや不安があっても表出しないようにしておられる様子もうかがえた。巡回診療の対象者などの情報交換の会話中や、ハンドマッサージなどを行う中で、徐々に心情や疲れを表出され、涙を流される支援者もおられた。

災害慢性期となり、避難所生活における物資や環境は整ってきている避難所が多い反面、今後はこころのケアのニーズが高く、身体側面の安全や生活環境が整ってきている状況において、心身の安楽やQOL向上に向けたニーズ充足も大切になってくるのではないかと感じた。

### 【避難所アセスメントについて】

輪島市内には、指定避難所と自主避難所が多数混在しており、今後の二次避難先の拡充に伴う、避難所統合に向けた動きが開始されている状況であった。避難所によっては未だ簡易トイレを使用している自主避難所などもあり、環境や物資の状況が整った指定避難所との格差も残っている状況だった。

また一部の自主避難所では、被災者が県外へ転居されたり、二次避難所へ移動されたりしたことで、自然消滅的に閉鎖されている避難所も見受けられ、被災者の足取りを行政が確実に把握することの困難さを感じた。

介護、介助を必要とする被災者を支援する、福祉避難所の増設・開設が進められており、受け入れ準備として段ボールベッドの設営を行った。



最後に、私たちが安心して救護活動に専念することができたのは、日本赤十字社、大阪府支部、大阪赤十字病院のみなさまの支援のおかげであり、感謝申し上げます。また、被災地のみなさまが1日でも早く心穏やかな生活に戻れますよう、心よりお祈り申し上げます。

大阪赤十字病院 第9班 一同